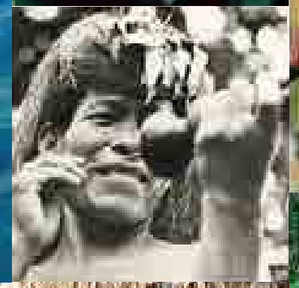


特集 夢のアマゾン大冒険

写真は『共生の大地 アマゾンに生きる人々』(1992年、太平印刷)より。撮影は鴻池安志さん。本書の監修・文を山口吉彦さんが担当している。
協力=一般社団法人 アマゾン資料館、公益財団法人 致道博物館、「山口吉彦コレクション 探検!アマゾンワールド」企画メンバー"探検隊員"の皆さん

全長6000㎞超の流域に世界最大の熱帯雨林が広がる南米アマゾン。そこには原始の森と先住民の暮らし、多種多様な動植物が現存しています。鶴岡市の文化人類学者、山口吉彦さんは子ども心に夢見たアマゾンの大地を踏み、約50年に及ぶ調査研究の中で、2万点もの現地資料を収集しました。山口少年が夢の行く先で得たものは、道しるべとして私たち人間の行き先を照らしています。

特集 夢のアマゾン大冒険

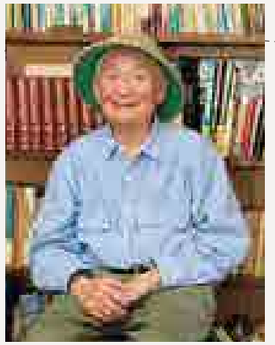
山口吉彦さんのアマゾン探検記

山口さんが子どもの頃にふれた庄内の自然は
はるかアマゾンを冒険するという夢を与えました。
夢を叶えようとする強い心と、好奇心を携え旅したアマゾンには
「自然と人が共に生きる文化」が豊かに残されていました。

子どもの頃、昆虫が大好きだったという山口さんは、カブトムシやクワガタムシを捕まえるだけでなく、昆虫の詳しい知識を持つ少年でした。小学生の時に見た図鑑で〝動植物の宝庫〟南米アマゾンを知り、その大地に夢を抱きます。

東京農業大学の農業拓殖学科に進んだ山口さんは、熱帯農業や生態学を学んだ後、フランスのボルドー大学に留学し、リヨン大学に転学、文化人類学と出合います。「留学中に読んだ人類学者レヴィ・ストロースの本『悲しき熱帯』が僕の心に訴えかけたんです。アマゾンの先住民が自然と共生して暮らす精神性や知恵を、彼らと生活して体験してみたい、そう強く思いました」。

山口さんはヨーロッパやアメリカなど数カ国でフィールドワークをしながら、研究機関でアマゾンの文献を読み漁り、30代に差しかかる頃、ついに念願のアマゾンへ足を踏み入れます。「先住民インディオはとても警戒心が強いんです。でも私が網を持って蝶を追いかけていたら子どもたちが近づいてきて、そのうち友だちになって僕を先導してくれました。先に子どもたちと仲良くなれたことで、大人が心を開いてくれたんです」。どの部族を訪ねても、真っ先に仲良くなるのは子どもたち。「僕が子どもの好奇心をそのまま持っていたからでしょうね」。先住民と打ち解けた後の山口さんは、一緒に狩りに行き、寝食を共にするまでに。お酒を酌み交わし「アミーゴ（仲間）」と互いに肩をたたき合ったことも。そうして当時150ほどあった部族のうち20数部族を訪ね、物々交換で収集した民族資料は膨大な数になりました。「彼らは狩猟民族として、自然を崇め、生態系のバランスを壊さないように糧を得て暮らしています。



山口 吉彦さん

1942年、鶴岡市陽光町生まれ。鶴岡南高校、東京農業大学農業拓殖学科卒業。フランス留学中に民族学を学び、念願のアマゾンの調査研究へ。約60カ国を踏査し、多くの民族資料を収集した。帰国後に資料を公開、90年代には鶴岡市がアマゾン民族館、アマゾン自然館を開館（2014年閉館）。国際交流と平和協力に多大に貢献。

TSURUOKA
JAPAN

AMAZON

初めて少数民族の地を訪れた時にペルーのウィトト族と物々交換した太鼓。「日暮れに聞いた太鼓の音がとても心に響いて。日本に持ち帰って子どもたちに叩かせたいと思いました」。

アマゾンに滞在していた時の山口さん

写真は、山口さんが監修・文を担当した『共生の大地 アマゾンに生きる人々』（1992年、太平印刷）より。対談の中で山口さんは「風俗習慣や文化が違っても、多様な価値観をお互い認めあえれば、人間は共生が可能」と語っている。

自然は先人たちから借り受けたもので、自分たちも孫子の代まで残すことが義務であり、未来への希望だと。この考え方を現代人すべてが持っていたら、すばらしい地球を未来へ残せると思います」。

約半世紀にわたる現地調査は、山口さんの飽くなき探求心と、その姿に共感し、資金面で支え続けた奥様の考子（なすこ）さんの存在なくしては実現しませんでした。山口さんのアマゾンコレクションは今、鶴岡市陽光町の「アマゾン資料館」に収蔵されています。昆虫の標本、ほ乳類、魚類、鳥類、両生類、は虫類などのはく製、先住民の生活用具など、それらは神秘と崇高な気配を放って私たちの目に映ります。「アマゾンという夢の大地は、時に厳しく危険で、でもそれ以上に新しい発見に満ちて、人間の原点を教えてくれました。日本の子どもたちにもこのコレクションを通して、自然と人間はこうやって一緒に生きていくんだということを伝えたい。お金だけが大事なのではなく、夢を持ち、叶えようとする心の大切さも伝えたいと思っています」。

山口さんが最も影響を受けたという人類学者レヴィ・ストロース。名著『悲しき熱帯』と『野生の思考』では、少数民族の思考が人間の根源的な思考であると述べ、現代社会に多大な影響を与え大ベストセラーに。

特集 夢のアマゾン大冒険

探検！アマゾンワールド 1

致道博物館で6月22日に開幕したばかりの「山口吉彦コレクション 探検！アマゾンワールド」は、市民参加型の珍しい企画展。不思議で、魅惑的で、ちょっと不気味な（?）未知なる世界と出合えます。

山口 考彦（なすひこ）さん

山口吉彦さんのご長男。1976年、ブラジル・ベレン生まれ。4歳で両親と鶴岡に移住し、高校卒業後、コロラド大学に留学。青年海外協力隊やJICAに所属し、国際協力に従事した後、2018年に帰郷。翌年、一般社団法人アマゾン資料館を設立。代表理事。

6月22日から致道博物館で開催している「山口吉彦コレクション 探検！アマゾンワールド」は、コロナ禍だった2020年の展覧会に次いで、一般社団法人アマゾン資料館と致道博物館の共同主催による2度目の企画展です。しかしそのコンセプトと内容は前回とまったく異なるそう。父・吉彦さんの2万点に及ぶコレクションを保管・管理する代表理事の山口考彦さんが、今回のアマゾンワールドの総隊長を務めています。「法人を立ち上げてから、父のコレクションに興味を持ってわざわざ見に来てくれる人って、本当にピュアな視点でアマゾンの資料を面白がって、愛おしんでくれます。その姿を見た時に、その方たちの視点や感性を可視化したら、どういう展覧会ができるんだろうと思いました」。

今年3月、一緒に展覧会をつくる仲間を「アマゾンワールドの探検隊員」として募集。すると家族や親子、20代前半の大学生など、予想を大きく上回る40名ほどが集まりました。探検プログラムの内容は、3月20日に鶴岡のエビスヤビルで開催された「つるおか独創百貨」でのお披露目の際に、山口吉彦さんのギャラリートークを皮切りに、資料館をアマゾンのジャングルに見立てた探検やキャッサバの実食体験、盗掘者のアジトへの侵入をテーマにした廃墟探訪など、好奇心をかき立てるものばかり。2チームに分かれて1カ月ほどかけて行い、最終日の5月12日には致道博物館を会場に、4チームそれぞれに探検で発見した宝物について話し合い、模擬展示企画を考えて発表しました。「アマゾンに対する僕なりの定義は、『多様で多彩な空間の中に個性とインパクトがあるものが混在し、それぞれが互いを必要としている』というもので、まさに今回の探検プログラムで隊員の皆さんから感じたものでした。その多彩で多様なアイデアや感性を、どう致道博物館の展示空間で表現するか、僕自身が今、ドキドキワクワクしています」。

長く親しまれてきたアマゾン民族館と自然館が2014年に閉館し、2017年に母・考子さんが逝去され、「お父さんを頼む」という遺言に導かれて鶴岡に帰郷したという考彦さん。膨大なコレクションの行く末を案じ、頭を抱えた時期もありましたが、探検隊活動を経て、「子どもの頃からずっと見てきて、今ほどコレクションが輝いている時はない」と笑顔で語ります。昆虫や動物などの生き物に始まり、民具や装飾品、不思議な呪術品まで、資料館で静かにエネルギーを蓄えていたアマゾンのコレクションが今、動き始めます。

探検最終日は、4チームに分かれて模擬展示を発表！部族と模様をテーマにしたり、生き物をテーマにしたりと多様なアイデアが生まれました。

Dグループは生き物の色と形がテーマ。蝶の羽の色が表と裏で違うこと、魚の口の形が違うことなど、発見や疑問をみんなで共有し、発表しました。

山口吉彦コレクション
探検！アマゾンワールド

2024年6月22日～8月18日 ▶致道博物館 美術展覧会場

入館料／一般1000円、高大生400円、小中生300円
開　館／9:00～17:00（入館は16:30まで） ※開期中無休
会期中、さまざまなイベントがあります。詳しくは致道博物館の公式ホームページへ。

AMAZON COLLECTION

探検！アマゾンワールド 2

手の込んだ生活道具や不思議な生きもの、呪術道具など…。
探検隊員の皆さんが4回の活動を通して
どんな「宝物」を発見したのか、教えてもらいました。

特集 夢のアマゾン大冒険

市川さんご家族

市川美穂さん、咲良ちゃん、大志くん、杏奈ちゃん、誠也くん

好奇心旺盛な子どもたちの ワクワクにつながる機会を

動物のはく製、昆虫の標本、原住民の生活道具など、野性味あふれるコレクションを探索していると、自分がインディ・ジョーンズになって冒険しているような気持ちになりました。資料の中から「干し首」を発見した時は、「こ、怖い！」と思ったのと同時に、これを展示したら、「すげー」「やべー」なんて言いながら子どもたちがキャッキャする姿も想像したり。干し首には敵の魂を封じる意味もあるらしく、殺してもなお相手の魂の存在を恐れたアマゾンの死生観を感じます。

コレクションは今では入手が難しいものも含め、これほど多くのものが鶴岡にあることを皆さんに知ってほしいです。見るとドキドキしたり、ちょっと怖かったり。これらを収集した山口先生は、現地でまず子どもたちと仲良くなったそうで、好奇心旺盛な子ども心は世界共通ですね。子どもたちのワクワクにきっとつながるはずなので、今後たくさんの子に見てもらう機会ができたらなと思います。

山形大学理学部の皆さん

樋口眞人さん、本田花さん、青木志恵さん

多種多様な動植物にふれる機会 将来は博物館の学芸員に

博物館の学芸員になることを目指しているので、展覧会を企画できるこの機会はスキルアップにつながると考えて参加しました。大学では生物学を専攻しており、歴史や文化に触れる機会も多かったため、アマゾンの人々と多種多様な生き物、その関わりと営みにとても興味があります。展示をご覧になった皆さんからも、異国の生活文化、精神文化の一端を感じ取ってもらえたらと思います。（樋口さん）

私はアマゾンに生息する魚類の「口」の多様性に注目しました。また、同じ班の方の「モルフォ蝶」という美しい蝶の裏側が地味という切り口から、「生物のなぜ」を追求する展示を考えました。生物の不思議や面白さ、それらはアマゾンの環境の中でどのように適応しているのか、実物を通して考えをめぐらせていただきたいです。この貴重な資料が長く保存されて、多くの人の目に触れることを願っています。（本田さん）

松本さんご家族

松本典子さん、柚季ちゃん、駿くん

地球の反対側の暮らしから 自分たちとの違いや共通点を

子どもを日本とは違う世界に触れさせたくて親子で参加したところ、子どもたちは生きものに関心が強いという新たな一面を知りました。ワークショップでも小2の息子が選んだテーマは「虫」。自分では絶対に選ばないけれど、じっくりと向き合ってみたら意外とかわいい？　貴重なコレクションなので本来は大切に扱うべきですが、ひとえに山口さんの寛容さのおかげでかなり自由に触れることができ、ワークショップでは標本にする前の蝶の「裏側」を企画の主軸にすることができました。博物館の展示でも、実際に触れる機会が多くあるといいなと思います。

私個人の感想としては、「テーマの食わず嫌いをやめよう、子どもたちが生きものに触れる機会を増やそう」で、参加者の皆さんの自分とは異なるものの見方も面白かったです。今回の展示では、地球の反対側の暮らしから自分たちとの違いや共通点を見出して、日常を大切にしていくきっかけにしていただければと思います。

金子さんご家族

金子朝彦さん、郁美さん、糸ちゃん

自分の好きなことに徹底的に 向き合うことの素晴らしさ

以前からアマゾン資料館に興味があり、致道博物館での展示にも関われるとのことだったので、家族で参加しました。身の回りにある材料で作った道具の幾何学模様や装飾性にとてもひかれ、どんな部族が作ったのか、部族ごとに模様に違いがあるのかなど、とても興味を持ちました。マップにそれぞれの部族の特徴や暮らしぶり、使用している道具や模様などをわかりやすくまとめて展示できたら面白いですよね。

ワークショップでは、メンバーの着眼点がそれぞれ違っていて、自分では見つけられなかった資料も多く目にすることができました。一つのアイテムについて意見を交わし、アイデアを出し合う中で、仲間のような感覚が生まれ、ものを見る時は決めつけず、いろいろな見方をしてみようとあらためて思いました。今回の企画展では、自分の好きなことに徹底的に向き合うことの素晴らしさを体感してほしいなと思います。（郁美さん）

寄稿

アマゾン・コレクションが語りかけること

成瀬 正憲

ベーリング陸橋を越えて、今日アメリカと呼ばれる大地に人類が足を踏み入れたのは約2万年前といわれています。以降南北アメリカ大陸に拡散し、生活を営んだ人々は、多様きわまりない住まい方や集い方、生のあり方をつくりだしてきました。

それが一変したのは1492年、スペイン両王の援助を受けたクリストバル・コロンによる「新大陸」の発見でした。数万年にわたって人が住んでいたにもかかわらず、その地を「新大陸」と名指し、キリスト教の信仰をもたない人々を「野蛮人」とみなし、布教を口実にして内実は土地を収奪、金銀財宝を略奪し、人々を奴隷化していったのです。

自らとは異なる信仰や生のあり方をもつ人々を、「信仰なき、法なき、王なき」劣った存在と位置づけ、支配を正当化した植民者たちは、先住民たちを蔑視し、残虐非道の限りを尽くしました。先住民のなかにキリスト教へ改宗する者が現われて奴隷化の口実がなくなると、アフリカ大陸から黒人たちを奴隷船に乗せて「新大陸」で売り払い、大規模な単一栽培農業で酷使し、収穫させた砂糖、タバコ、綿花をヨーロッパへと運び、もたらされた繁栄によって資本主義が興隆し、〈西洋近代〉が築かれました。現代に至りグローバリズムとして形を変えたそれは、人類の共通の生の基盤であるこの惑星をも搾取しながら、なお「世界」の枠組みを規定しています。その「世界」のなかに、気候変動による海面上昇で沈みゆく島々や、民族浄化の惨禍にあるパレスチナのガザは、入っていないかのようです。

〈他者〉とともにあること――自分と異なる存在を、異を同とすることなくそのままに受けとめ、尊重すること。それが今日ほど求められている時代もないのではないでしょうか。

2024年3月に開催された「つるおか独創百貨」の展示企画「山口吉彦アマゾン徒歩旅行」では、成瀬さんが展覧会テキストを寄せた。

アバライ族のかご。作りかけの状態から、作り手の視点など多くの情報が読み取れる、と成瀬さん。日本やアフリカなどにも同じ編み方が見られ、人類共通の生活の技術とも考えられる。

「未知の世界をみて、自分の足で踏みしめて、そこに住んでいる先住民と同じように生活してみたい。彼らの生き方を学びたかったんです。たしかに素朴で、機械文明とかそういうものとまるきり違うし、便利さともほど遠いものかもしれないけれど。アマゾンに行くたびに、わぁって、あたらしい発見と感動があったの」

そう語る山口吉彦さんが鶴岡からアマゾンへ辿りつき、アマゾン・コレクションを展示するまでには、いくつもの偶然の積み重なりがありました。偶然性は飼い慣らせず、ただ応答するしかないもの。無視するのではなく、圧するのでもなく、つどの不確性に応答することは、山口さんを揺さぶり、次の歩みをもたらしました。一歩ごとに開かれる世界と、そこに住まうさまざまな存在たちと、自らの生とを織り合わせてできた山口さんの軌跡。それは、アマゾンの森と大河、精霊と人々とを織りなしたようなその手仕事たちと響き合いながら、出会い、傷つき、愛し合うことの豊かさを、人も惑星も相互にケアするような生のあり方を――他者とともにあることの大切さを、私たちに語りかけているのではないでしょうか。

なるせ・まさのり◎岐阜県出身。2009年に鶴岡市へ移住し羽黒町観光協会に勤務。2011年出羽三山の山伏文化と精進料理の世界をパリやブダペストに紹介、2012年出羽三山精進料理プロジェクトの立ち上げに尽力するなど地域の仕事に携わる。同年独立し日知舎（ひじりしゃ）を設立。月山山系の山菜・きのこなどの採集と流通、失われつつあった手仕事のリデザイン・制作・流通、地域文化の調査研究等の多様な事業を行っている。共著に『私たちのなかの自然』（左右社、2022年）、『思想としてのアナキズム』（以文社、2024年）など。東北公益文科大学非常勤講師（文化人類学）。